

《優秀賞》

「今にも伝わる戒石銘の教え」

安達中学校 一年 安齋 聖菜

この二本松の地に語り継がれる教え、戒石銘。江戸時代の二本松藩士たちはもちろん、現代でも人々に感謝の心の大切さを伝え続けている。

「お前の給料は、民があぶらして働いたたまものから得ているのである。お前は民に対して感謝し、労わらねばならない。この気持ちを忘れて弱い民たちを虐げたりすると、きっと天罰が下るだろう。」これが戒石銘の教えだ。この教えは、五代藩主丹羽高寛公が、儒学者岩井田昨非の意見を聞き、「藩士の戒め」とするため自然石に刻ませたものだ。

私は、教えを知ったとき、とても驚いた。江戸時代といえば身分制度があり、農民の上に武士が立っていて、農民を虐げているイメージがあったからだ。しかし、イメージが間違っているわけでもなかった。当時は、藩の財政が厳しく、給料を削られる藩士も出て生活が苦しくなり、武士道も地に落ちていた。だから、「儒学は弱々しい人間のやることだ。」と考える藩士も多かったそうだ。その中で昨非の半強制的な学問の押しつけに反発する者もいた。反対する人々

は、農民たちに「下民はあざむきやすい。虐げてあぶらをしばれ、そして汝らの禄とせよ。」と教え、戒石銘の誤解を利用して昨非を追放しようとしたのだ。

この話を知り、私は、現代と同じような感じではないかと考えた。まるで、気に入らない人の嘘の情報を広めたりして追いつめる今の「いじめ」のようだと。

私は、今も昔も反対するような人々にこそ戒石銘の教えが必要だと思う。もし教えを大切にしていれば、農民たちに嘘を言うことはなかっただろうし、最初からこんなことは起こらないはずだ。

今を生きている私たちにも、戒石銘に刻まれた「感謝」の気持ちをお大切にすること、それから、感謝の心を「伝える」ことが大切だと思った。私は、決して一人で生きているわけではない。家族や学校の先生、友達、地域の人たちなど、改めて考えるとたくさんの人に支えられながら人生を歩んでいる。でも、支えてもらっていることに対しての感謝は忘れてしまっていると感じた。特に、家族への感謝は「なんだか恥ずかしい」とブレーキがかかってしまい、なかなか言い出せない。自分が恵まれた環境で、食べ物に不自由なく、学校に行けて、勉強や部活を頑張ることができて、自分がやりたいことを全力でやることができるのは、周りの人のおかげだと戒石銘について調べていくうちに気づかされたのだ。だから、口にかかっているブレーキを外して、心の中にある感謝の気持ちを支えてくれ

ている人たちに伝えていきたいと思った。

私の住む二本松市。この地に語り継がれる戒石銘は今まで忘れていた様々なことに気づかせてくれた。これから、さらに成長していったら、また忘れてしまうかもしれない。苦しいこと、辛いことなどの負の感情でいっぱいになってしまうことがあるかもしれない。そんな時に、二本松の地でずっと感謝の気持ちの大切さを伝え続ける戒石銘があれば、思い出すことができる。

私は将来、戒石銘の教えを心に刻んで、自分よりも下の人を労われるようになりたい。そうして、いろいろな壁を乗り越え、未来に向かって成長した姿を、支えてくれている人に「ありがとう」の言葉とともに見せられるようになりたい。